

阪神・淡路大震災

**震災を体験して
あのとき役立った私の知恵**

平成 11 年度
(令和 3 年度再編集)

神 戸 市

目 次

第1章 災害への備え

1. 家庭での備え	2
(1) 水	2
(2) 電気・ガス	7
(3) 食料・食器	9
(4) その他役に立ったもの	11
(5) 非常持ち出し品	13
(6) 家内の安全	16
(7) 住まいの安全	22
2. 地域での備え	25
(1) 救援・救助	25
(2) 情報伝達	26
3. 心がまえ	27
(1) 情報収集・情報確認	28
(2) 安全確認	29
(3) 人とのつながり	30
4. ボランティア	33

第2章 まちづくりの提案

1. ライフライン	36
2. トイレ	39
3. 広報	39
4. 避難場所	39
5. 物資の備蓄	40
6. 救援物資	41
7. 仮設住宅	42
8. 建物の耐震化	42
9. メモリアル	43
10. まちの美化	44
11. 水と緑の豊かなまちづくり	45
12. その他	46

神戸市では、阪神・淡路大震災の教訓と経験を風化させることなく、貴重な経験としてご支援いただいた全国のみなさまや次世代に伝えていくため、震災から5年目にあたる平成11年度に、市民のみなさんとの協働により「復興の総括・検証」を行いました。

その中で、「震災の体験を通じて得た知恵・アイデア」の募集を行い、約500件ののぼる知恵・アイデアが寄せられました。震災の体験を通じて、神戸市民の手によって生み出された貴重な知恵とアイデアを一人でも多くの方々にご覧いただき、これから発生しうる災害に備え、ご家庭や地域で活用・実践されることを願います。

第1章 災害への備え

1. 家庭での備え

災害時に最も困ることは、水、そして食料の確保です。家具の転倒防止、非常用持ち出し品の準備など、家庭で備えておくべきことは多くあります。阪神・淡路大震災では、日頃からの備えが大いに役立ちました。

(1) 水

震災直後、神戸市域のほぼ全域で断水。震災後1ヶ月を経過した時点で、復旧率は7割に達しました。全戸通水は、震災から3ヶ月後の4月17日でした。震災直後から給水車を中心に応急給水活動を開始しましたが、被害が市内全域にわたったこと、また、交通渋滞がひどく（特に、被害が大きく、応急給水の必要度の高い地域ほど道路事情が悪く）、なかなか計画どおりに進みませんでした。



① 飲料水

- ・あたり前かもしれないが、やはりペットボトルの水を常時数本備蓄している。水道管破壊により水の復旧が一番遅かった。災害時は1日1人1リットル必要で、2日分は自分で用意。行政が動いて、水が到着したのは3日目と聞いたように思う。

(東灘区、63歳、女性)

- ・飲料水を確保するため、庭の水道栓の近くにバケツを置いて毎日水を満杯にしていた。

火災予防・初期消火が主目的であったが、飲料水として役立った。

(兵庫区、男性)

- ・翌朝の食事用水として、やかんに水を入れてガスコンロの上で準備していた。ほこりが全く入っていないくてそのまま飲料水として使用できた。

(兵庫区、男性)

- ・早朝にもかかわらず起きていたのと、家が倒壊しなかったので、停電、断水に備えて、水と食料を確保することに努めました。炊き上がっていたごはんでおにぎりを作り、米をとぎ、もう一度炊き、それもおにぎりにしました。水はやかんや鍋、ポットなど、できる限り汲み置きました。冷蔵庫のハムやきゅうり、チーズなどをパンに挟み、サンドイッチを作りました。二度目のごはんが炊き上がってから停電、断水になりましたが、2人で3日分の食料と水になりました。

(須磨区、65歳、女性)

- ・災害が起これば大変なことを実感しました。被災地ではライフラインが遮断されました。そこで、飲料水（2日分位）と保存食少々を確保を。

(灘区、70歳、女性)

- ・当時飲み水はジュース、ビールの蓄えがあったのでそれで当分しのげた。

(東灘区、57歳、男性)

- ・私は1995年1月のあの日、避難所に行くことができず、寒さと余震におびえながら、散乱した家の中で行政からの援助もなくすごしました。6日目に電気、30日目に水道、70日目にガスが復旧しましたが、普段あたり前のように思っていたものがいかに大切なものか。戦争で焼け出されて身一つになった当時と同じことを五十余年ぶりに体験しました。その時の経験から、私自身はあまりパニックになりませんでした。水がなければ生きていくことができません。たまたま買い置いていた牛乳数パック、食パン、それから高速大開駅から地下水がふき出していましたので、それを飲み水にしてすごしました。

(兵庫区、67歳、女性)

- ・実母が亡くなって17年になりますが、その母は私が子供の頃から、「生きていきながらも、明日はわからないよ」と言っていました。いつも1食分の食糧と飲み水は切らすことがなかった。お水は1メートルもある大きなかめに水をきれいにしておくみ置きしていましたので、私もそうしなければいけないと思い、生きて参りました。結婚し

てからも、親と同じように、かめがないのでポンジューズのビンを利用して、飲み水を30本30リットルくみためて生活をしており、食べ物は冷蔵庫を3つ置き、いつも満たんにしていました。震災の折は正月過ぎでお餅を沢山作り、3つの冷蔵庫に分けて入れていましたので、ご近所、会社、友達、お得意様等に一食分助けることができ、母の言葉が大変役に立ちました。私の知り合いで地震の起きた時にコップ1杯の飲み水がなかった人もいました。私は今でも母の言葉を守って生活をしています。

(長田区、64歳、女性)

- ・1995年1月17日午前5時46分、この日、この時間は、震災に遭った方々は生涯を通じて決して忘れることはないでしょう。突然大きく前後左右の激しい震動に襲われ、かつて経験したことのない阪神・淡路大地震の始まりだった。幸い、家族は怪我もせず無事でした。次に障子を開けて見ると、本棚は倒れて、内の本は部屋中いっばいに散らばっている。台所はと見ると、床一面食器類が散乱、水栓をひねっても一滴の水も出てこない。玄関のドアをこじ開けて表へ出ると、東の空には黒煙がもうもうと立ち込め、大変な事だとは判っても情報がなかなか思うように入ってこない。とにかくまず水を何とかしなければとあせっても、給水車が来ると言うニュースだけで、車は姿さえ見えない。容器を持ってうろうろしていると、見知らぬ人から「あそこへ行きなさい。井戸があるので水は頂けますよ。」と声を掛けられて、その家の方に頼んでこころよく水を頂くことができました。ことに臨んでイザという時にうろたえず、あわてず、しかも悠々としてことに当たるといことは至難のことです。ここで私見として、就寝時には大きな容器幾つかに水を一杯入れて置く。

(垂水区、72歳、男性)

【ワンポイント・アドバイス】

1月17日、市域全域で給水がストップ。しかしながら、給水管が破損していなければ、配水タンクやマンションの受水槽内に貯まっていた水が、自然流下により通水状態が保たれていました。大きな地震が発生した場合に、蛇口から水が出ているからといって、決して油断しないでください。タンクが空になれば、当然のことですが、水が出なくなります。2～3日分（1人あたり1日3リットル）の水を備蓄しておくことをおすすめします。



② 生活用水

- ・震災の前日においしい水（布引の湧き水）を2リットルのボトルに6本汲んできておりました。翌朝震災になり、飲み水がないと近所で騒いでおられ、早速持って行き、皆さんに飲んでいただきました。しかし、断水が続き、トイレに流す水もなく、風呂

水（前日の残り湯）を流したりしましたが、底をつき、近所を探し回って朝日湯さんが地下水を分けて下さっていると聞き、バケツ1つ持っていただきに行きました。若いお兄さんが寒いのにホースを1日中持って皆に分けて下さっていました。本当にありがたく思いました。我が家には小さいバケツ1つしかなく、三階まで階段を上がるのが大変で、水を入れて運ぶブリキ缶と台車を近所の方に貸していただき、風呂場に置いていました。市からの飲料水は1度車が通り過ぎて行っただけでした。朝日湯さんが破損した家で燃料を集めて風呂をわかして下さり、雪の降る寒い日に、朝から200人程並び、38日振りに風呂に入った時は「地獄で仏に会う」とはこのことかと生きた心地がしてとてもありがたかったです。

（中央区、70歳、女性）

- ・震災という大きな災害にあった時に、普通に生活している時には絶対思い付かなかった知恵がありました。まずお風呂の水がこんなに役に立つとは思ってもみなかったです。たまっていた水をトイレなどに使用し、なくなったら水をもらってきてお風呂にためて使用していました。

（須磨区、19歳、女性）

- ・家屋に大した被害もない私どもでは何も言えませんが、水が長時間出なかった時に、風呂桶が前夜の水で満たされていたことは助かりました。トイレはもちろん、洗面にも少々我慢して使いました。トイレはどこでも水洗トイレが使用不能になりましたが、「水が無ければ使えない」ということをまず考えるべきだったと思います。水の大切さを常日頃、知っておくようなキャンペーンがほしいですね。

（須磨区、66歳、女性）

- ・避難先として学校へ行きましたが、断水下の共同トイレの状態には閉口してしまいました。文化的な生活も断水すればこんな状況になってしまうのかと、改めて考えさせられました。もちろん水だけに限らず、文明の名のもとに生活しているすべてのものが、その源を断たれると、こうも大きな影響を及ぼすのかと、頭では解っているけど、実際に直面してみると、何も分かっていないというか、心の準備ができていないことに気づかされました。今夜も我が家では、風呂の水は浴槽の八分目ぐらいまで張っています。

（長田区、56歳、男性）

- ・震災から5年目を迎えましたが、水道の水が止まってしまったことが大変困りました。幸い我が家には昔（明治時代）からある井戸が非常に役に立ちました。井戸の地下水は深く、昔から良質の水がわき出ていました。23年前に家を建て替えた時から、井戸

をさらえて底からわきでる水を毎日使ってきたおかげで、あの時こそ近所の人々にも重宝され、分けあって使いました。あの時の水のありがたさは忘れることができず感謝しております。思いますに、もしもの災害の時に地域に1本地下水のポンプがあったらと痛感いたします。

(西区、64歳、男性)

- ・浴槽の水張りは、夫の意向で浴槽はその日のうちに掃除をし、新しい水を張っておくことになっていた(夫は過去に、地震にあったことはないが、必ず役立つからと常日頃から言っていた)。

(灘区、45歳、女性)

- ・私は六甲アイランドのあるビルに勤務していた。平常は、美しく明るい快適な空間のある都市として定評があったが、大地震により、瞬時にあらゆる苦難に襲われたのは多くの市民と同じです。その中の体験から得た話を述べたい。水道の断水により、住宅・ビル・事業所等の水洗便所等が使えなくなったとき、助かったのは島の中央にある大きな泉水(リバーモール)であった。夏は子供たちの水泳や遊び場所、春秋は散策や憩いの場所として親しまれた泉水(リバーモール)、ちょうど冬季で水量は減じていたが、トイレ用水や洗濯ものなどに多くの人が汲み出しました(24時間いつでも採水できた)。

(須磨区、68歳、男性)

- ・内径3ミリメートルぐらいのビニールのチューブでサイフォンの原理を活用しました。水道なみの便利さ、両手も使え、少しの水で食器洗いなども快適でした。

(垂水区、男性)

- ・震災前は一戸建ての家に住んでいましたが、その頃から雨どいを地面よりいくらか上で切り、その下にバケツを置いて雨水などをため、植木等の水やりに利用するようにしていました。地震の時、1日分ぐらいのトイレなどの水は、そのバケツの水で賄えましたし、雨が降ればバケツ何杯分もの水が簡単にたまりました。ささいなことですが、とても簡単で水の節約にもなることですので、試されてはいかがかと思います。

(須磨区、37歳、女性)

- ・バケツの水の運び方について：水の入ったバケツは重いですが、「両手にバケツ(=やじろべえ状態)」は意外と楽です。バケツが2個ある時は、2人で1つずつ運ぶのではなく、1人で2つを持って時々交代すると楽に運べます。

(須磨区、34歳、男性)

- ・給水車からバケツに水を受け取る時に、ビニールの袋をバケツの中に入れて上部をくくって持ち帰るとほこりが入らず、持ち運ぶときもこぼれなくて非常に役立った。
(兵庫区、男性)

【ワンポイント・アドバイス】

神戸市では、震災時に生活用水の確保に困窮したことを教訓として、市民・事業者・工場などが所有する井戸のうち、災害時に善意によって開放していただける井戸の募集、登録を平成8年度から行っています。

- ・災害時市民開放井戸の募集（神戸市ホームページ）

<https://www.city.kobe.lg.jp/a84140/kenko/health/hygiene/environment/saigaido.html>

(2) 電気・ガス

① 電気

- ・懐中電灯はバンドのついたものを（両手が使える。頭から照明できる）。
(東灘区、女性)
- ・当初、未明でしたからまだ外も暗く、家の中がどんなことになっているのか全く分からず、懐中電灯（非常灯）を家のほぼ真ん中に置いてあったので、家の中の状態を少しずつ知ることができました。今後の備えとして、非常灯をもう少し増やし、なるべく近くに設置しようと思っています。
(中央区、55歳、女性)
- ・1月17日の前日に今の家に引越してきました。転居のすぐ後だったので南も北も入口も、よく分からず家の中でうろうろしました。引越しのため足の踏み場のない所に、趣味の釣道具の箱の中に炭坑夫のつけている懐中電灯（ヘッドランプ）が見つかり、やっと家の中が分かりました。
(中央区、60歳、女性)
- ・深夜などに災害がおこってもすぐ光と情報を得るため、常に枕元に蛍光灯付きのラジオ（携帯）を設置した。
(北区、51歳)

- ・非常品については周知の通りであるが、重宝したものには乾電池の予備。
(中央区、52歳、男性)
- ・懐中電灯の乾電池は必ず点検を(1ヶ月に1回17日に)。乾電池がきれて使えなかった。
(東灘区、64歳、女性)
- ・タイマーにセットしてあったご飯とパン。当日、すべてのものが散乱し、危険物の片付けを優先したので、子供たちには朝、ビスケットを与え、食事をしたのはお昼過ぎ。何かを口にしなければとの夫の意見にふと気付いたのがタイマーにセットしてあった1カップのご飯(弁当用)。海苔をふんだんに1カップのご飯を2人で食べた。次にタイマーにセットしてあったパン。こちらは二次発酵が終わり、後は焼きの段階に入る状態でふっくらときれいに膨らんだところで止まっていた。これを一口大にちぎり、カセットコンロで焼いた。これは役立った。
(灘区、45歳、女性)

② ガス

- ・今回は幸い電気が早く供給されたので助かりました。情報もテレビから入りましたし、夜も電灯がつき何よりも安心しました。炊飯器も使えたので大いに活用できました。まず、御飯を炊いて沢山のおにぎりを作りました。そして、「朝食がまだです」と言われた人に差し上げたりしました。また、炊飯器の釜が空いている時はガスの代わりに保温スイッチで常にお湯を沸かしておきました。寒い時でしたので、お湯はずいぶん助かりました。また、炊き出しのお弁当等は冷たくなって食べづらくなっていたので、炊飯器のお湯をバケツに取り出して、お弁当をほぐして温めました。温かくて美味しいお弁当をいただくことができました。ちょっとした知恵で、冷たく味気ないお弁当もありがたく感謝しながら食べさせて頂きました。お風呂に入れなかった時は、その炊飯器のお湯で顔や体をふき、家族4人いつもすっきりとしていました。
(兵庫区、63歳、女性)
- ・地震前、飲湯はガスで沸かしていたが、地震後は電気ポットに交換した。
(須磨区、53歳、男性)
- ・ガスボンベ、キャンプ用ボンベ、コンロもリュックに入っていたので不自由しなかった。常に大きめの袋(リュックサックなど)に必要な物を入れておくことを提案したい。
(東灘区、57歳、男性)

- ・それまでは、カセットコンロは持っていませんでした。しかし、あの時父母にいただいたコンロは、非常に役に立ちました。今も使っています。

(長田区、50歳、女性)

【ワンポイント・アドバイス】

せっかく懐中電灯や携帯ラジオを準備していても、乾電池が切れていたのでは無用の長物。停電が長引くことに備えて予備を準備しておけば万全です。また、カセットコンロは、震災時のヒット商品でした。予備のボンベもお忘れなく！



(3) 食料・食器

① 食料

- ・神戸は六甲山の麓、御影石の上に立っているから、地震はよそごとと思っていた私達の考えを根本からくつがえし、現実として体験した。その後は、常に3日～1週間の備食、非常用品を貯えている。

(垂水区、70歳)

- ・日持ちする食品を必ず置いておくことです。例えば、ラーメンみたいなものです。日が経つと、段々とうすれていくものですが、この経験を忘れないようにしたいと思っています。

(長田区、50歳、女性)

- ・食料は、乾物（海苔などすぐ食せるものから乾麺、海藻類）を常備していたこと、大根・白菜など冬野菜のほか、芋類、干し柿、餅がたくさんあったこと（実家から送ってきていた）が心強く、役立った。

(灘区、45歳、女性)

- ・冷凍してあった残りご飯を順次自然解凍していき、手持ちの野菜・餅などと卵雑炊などにした。これは家族のみならず役立った。近所の乳児を抱えた奥さんが、でんぷん質のものがないため乳が出なかったと聞いた。

(灘区、45歳、女性)

- ・食事についてはおでんが一番（上からとつぎ足すことができる）。
（東灘区、女性）
- ・スーパーなどが混雑していて品物が不足してきたとき、冷蔵庫の冷凍食品をストックしておいたことはよかった。
（北区、30歳、女性）
- ・子どもの頃、常備食として母が台所の籠につるして蓄えていた乾物類をみていて、私も何となく買い込むようになっていました。冷蔵庫に入れなくてもいいものばかりです。それがこの度の地震で役立ちました。知恵とかアイデアとか立派なことではないのですが、少しの買い置きで助かりました。インスタントラーメン、うどん、そば、高野豆腐、干し湯葉、椎茸、切り干し大根、キクラゲ、干しぜんまい…を冷蔵庫の残り物と合わせて利用し、また、手作りの塩昆布、梅干し、ラッキョウ、いかなごのくぎ煮（垂水の名物）…などもずいぶん役に立ちました。青い野菜は多く出回るまでキャベツで我慢しました。避難先の長男宅近くの妙法寺（須磨区）の八百屋で大根1本千円、いちご1箱千円と随分足元を見た商店がありました。それでも取り合いになるくらい売れていました。
（垂水区、67歳、女性）
- ・ごはんも何の気なしにいつもお昼ぐらいにと思って残してしまっていたのが、おじやにして1食分を2回に分けていただき、とても助かりました。
（長田区、56歳、女性）

② 食器

- ・紙皿、紙コップ、サランラップを買っておく。
（西区、62歳、女性）
- ・食器は、食器洗い機の中に入っていたいつも使っている安い食器以外はほとんど割れてしまったので、カップラーメンのカップを食器の代わりにして、そこにサランラップをひいて何度も使えるようにしてご飯を食べていました。私は今後このような知識や体験を決して忘れることはないと思います。
（須磨区、19歳、女性）
- ・サランラップをお皿の上に先に敷く（洗わなくてすむ）。
（東灘区、女性）

- ・壊れても悔いのない物しか購入しない。

(中央区、51歳、女性)

- ・食器は洗えないので、ラップ、割りばし、プラスチック容器、紙コップ、ティッシュなどと、レトルト食品、パックのごはん、カップ麺、缶詰などが役に立ちました(缶詰には缶切りをセットにしておくとうい)。

(須磨区、65歳、女性)



(4) その他役に立ったもの

非常用持ち出し品のほかに、さまざまな日用品が各家庭で活躍したようです。ここでは、その一例をご紹介します。

① 大工用品

- ・大工用品の中にロープ等を備えていたことは役に立ちました。のこぎり、金づち、各種ロープ、大型スコップ、ビニールシート、はしごなど、日頃から一定の場所に置いていたので、すぐ探し出して家の応急修理、雨漏り、土砂の片づけ等に変役に立ちました。日用大工、園芸を趣味にしており、その諸道具が役に立ちました。また、昔人間でビニール袋、ビニールシートを捨てないで保存しておく癖があり、これが地震の雨漏り、後片付けの際に役立ち、助かりました。

(灘区、67歳、男性)

② アウトドア用品

- ・わが家では、電気、ガスがこなく、水だけは供給されていて、キャンプ用品の大活躍によってなんの不自由も感じなかった。アメリカなどでは、地方に行くと、電気、ガスが供給されない所も多く、アウトドア用品が普及していて用具も充実していると聞いている。実際良い物がある。結局、日ごろからの心がまえで、いざという時に自分のことは自分でやると思っていれば、おのずと結果が出てくるように思われます。



(北区、49歳、男性)

- ・キャンプ道具一式。雨でも風でも、役に立つように日頃思っていたことがずばり役に立ったことが今の私の自慢です。

(中央区、60歳、女性)

③ キャリー

- ・要常備品としては、携帯ラジオ、医薬品、懐中電灯、キャリー（可搬用量 30kg 程度のもの）、缶詰、大工道具（一式）。

（中央区、71 歳、男性）

④ スコップ

- ・今も毎晩枕元に懐中電灯、履物を置き、収納庫に飲み水、缶詰、ガスコンロ、ボンベを、入れ替えをしながら一応自分なりに用意しております。いざという時に玄関と裏出口にスコップ等もいるなど、建物の崩壊の様様をテレビの放映で見て強く感じました。

（兵庫区、67 歳、女性）

⑤ ビニールシート

- ・一戸建ての場合、屋根瓦が動いたため、一番に雨の心配があった。専門家が修理にくる前に、近所の人たちと助け合い、屋根に上ってビニール（ブルーの大きな）で雨予防をした。

（須磨区、女性）

⑥ 風呂桶

- ・大切なものは風呂桶の中に投げ込んでおくと、火事の場合助かる可能性が高い。

（東灘区、73 歳、男性）

⑦ ホース

- ・ホースは長いものを用意しておく（少々遠くからでも先に水道の出たところからいたただける）。

（東灘区、女性）

⑧ 炭

- ・昭和 30 年代頃の炭をどうしよう、どうしようと思いつつも保存しておりました。これもまた、電気、水道、ガスのないあの時、おじや、お湯わかしに大だすかり。それにお寿司屋さんのおはしを使用せずに残してあったので、これも火おこし用にとても便利でした。

（東灘区、77 歳、女性）

⑨ ちり取り

- ・意外と役立つものは「ちり取り」。室内の掃除の時ではありません。地中の水道管

が破裂、断水の時、アスファルトのひび割れからしみ出すように流れる水道水。これをすくい取るためには、他の物では不可能。そんなキタナイ水、飲めるか！とお思いでしょうが、ゴミを沈殿させ、塩素を少量加え、かきまぜた後、沸騰させれば問題なし（塩素とは、いわゆる「ブリーチ」のことです）。トイレの水用にであればもちろんそのまま使えます。

（須磨区、34歳、男性）

⑩ バイク

- ・車とバイクがあったことは役に立ちました。地震の3年前に60歳で車の免許を取っていました。これが地震の時に大変役に立ちました。道路事情が悪く、車はなかなか走れなかったが、それでも大阪に通勤する子供2人を最寄りの駅まで送り迎えすることができ、助かりました。また、地震当日から裏山に水を汲みに行くのに役立ちました。バイクは芦屋に住む娘の安否を確かめに行ったり、食料品、日用品の店を探し廻るのにずいぶん助かりました（車は渋滞で、また走れない道が多かった）。

（灘区、67歳、男性）

- ・震災当日は的確な情報がテレビ・ラジオなどのマスメディアからしか入ってこなくて（実際の情報は自分の目で確かめるしかなく）、どう行動するかと考えたが、電車、バス等はあてにできず、自動車も行動が制約される。そこで、オートバイそれもモトクロス用であれば荒地でも走れるし、80cc～100ccぐらいで扱いやすく、これを足がわりにしてずいぶん行動できた。自衛隊にも、オートバイ部隊などがある。スクーター（50cc）などを足がわりとして人々が運転していたが、これは道路などが整備されている平常時にはいいが、凹凸道などでは危険である。

（北区、49歳、男性）

⑪ お金

- ・まとまったお金を家に置いていたので、当座、銀行が開かなくてもそんなに心配はなかった。今後も当座の備え分は常に置きたいと思う。

（中央区、55歳、女性）

- ・硬貨（100円、500円玉）しか使えない場合（電話・自動販売機）もあった。

（中央区、52歳、男性）

（5）非常持ち出し品

震災後は防災グッズが注目を浴び、非常用持ち出し袋を用意する家庭が増えています。平成11年9月に実施した神戸市民1万人アンケートでは、65.8%の人が貴重品をすぐ

持ち出せるように準備していると回答しています。

しかし、せっかく準備していても、いざという時に持ち出す非常袋を押し入れや戸棚の奥にしまっていては間に合いません。すぐ持ち出せるように工夫しておく必要があります。



① 準備するもの

- ・貴重品、健康保険証、最少の現金、衣類少々を準備すること。

(灘区、70歳、女性)

- ・筆記具は書き置き・伝言など、情報をメモするのに役立った。また、せっかく單車があるのにキーが家具に埋まり使えず不便した。自転車や單車、車のある人は予備のキーも非常品に加えておくとよい。

(中央区、52歳、男性)

- ・常にリュックに缶詰、ジュース等の飲み物、タオル、ティッシュ、大きめのゴミ袋、紙コップ、紙皿、ハシ、スプーン、携帯コンロ（山登りなどに使用するもの）、救急箱（小さめのもの）、包帯、三角巾、バンドエイド、薬品、解熱剤、地図、懐中電灯、山登り用のくつなどを用意した。

(北区、51歳、女性)

- ・急な避難時に、防災グッズのほかにお年寄りが忘れてはいけないものとして、入れ歯、メガネ、ガムテープ（割れたガラスなど取れる）。

(東灘区、63歳、女性)

- ・私は山登りが好きなため、常に最低限の必需品（懐中電灯・手袋・非常食・くすり一式・食器など）をリュックサックに入れているので、地震の時すぐに取り出し使用することができた。

(東灘区、57歳、男性)

- ・地震の時、各自の枕元に携帯のラジオかテレビ、少し大きめの携帯ライトを常備していたので、すぐに着装して外に飛び出し、大きな音でニュースを流しました。テレビでは、長田の火災実況が報道され、近くの方々が何となく近寄って、状況を把握されていたようでした。身にしみて情報を知ることの大切さを知りました。それ以後、寝

る所には必ずこの二点と、靴、必要品をつめたリュックを置いております。やはり一番役立ったのは、液晶テレビでした。

(北区、70歳、女性)

- ・震災後はわが家では緊急の際に貴重品を持ち出せるようにリュックサックに納め、夫婦ともに寝室の枕元に置いている。衣類は季節毎に入れ替えている。

(北区、72歳、男性)

- ・一般的な防災用品にアイデアプラス！できれば夏用、冬用を見直したい。絶対に欲しいものは、カイロ（1月17日我が家にはなく、友人からもらって感激しました。冬の外は寒い！）。あれば便利なものは、(1)太めのろうそく（誰かの披露宴でもらったもの。乾電池は案外早くなくなります。）、(2)冬ならヤッケ、夏なら着替え（暑さ、寒さがこたえます。）、(3)軍手（素手での作業はつらい）。

(東灘区、46歳、女性)

- ・今、していることは、防災グッズの常備・点検（以前の物に医薬品・カップを追加した）。

(灘区、45歳、女性)

- ・偶然のことのようにも思うが、震災4日前の13日、金曜日の夕食後、“我が家の防災グッズ”なるものを夫が点検、改めて水とビスケットの日付を確認し、そのまましまった。中身は水とビスケット、角巾、ろうそく、懐中電灯が入った、至って簡単なものだったが、何年か前から9月には、中身を点検し、交換して、電気が消えたらこうして過ごす、ろうそくで子どもたちに疑似体験させていた。子どもたちは「わあ〜、誕生日みたい」という程度（当時は幼児）だったが。

(灘区、45歳、女性)

- ・街のあちこちで、ばんそう膏など日用品を配ってくれたボランティアの方、いろんなところで炊き出しはありましたが、特に粉ミルクを用意していたボランティアの方には感心しました。

(東灘区、63歳、女性)

② 置き場所

- ・服やヨットパーカー、座布団にいろいろなポケットを作って、貴重品や薬などを入れられるようにして、1人に1着ずつ作っておけば、リュックなどに入れずに服としてすぐに逃げる事ができると思います。

(長田区、42歳、女性)

- ・非常持ち出しとして、本当に必要なものだけをリュックサックに入れて、目をつぶっていても取り出せるようにしておく必要があります。

(東灘区、73歳、男性)

- ・めっちゃめっちゃというか、2階の部分が1階にのしかかって、門も塀も形はありませんでした。中に入って貴重品（銀行、郵便局通帳、生命保険証等）を探すのに困ってしまいました。今は、手ごろな金庫を買い、貴重品をまとめて入れて、押し入れの一番下の右端に置いています。鍵や番号表もタンスの一番下の引出しに入れてあります。

(長田区、70歳、女性)

- ・今回の震災で、非常用品を押し入れ等に保管しておくことの無意味さを知らされた。時間的に余裕のある災害にはいいのだが、今回のように一瞬にして家具が総崩れになった場合には、いったん外へ避難し、再び中へ入ろうにも何がどこにあるのか分からない状態であった。そこで、出入口付近の下駄箱または郵便受けに最低必要な物を置いておくことにした。

(中央区、52歳、男性)



- ・防災用備え袋は、車の中、玄関など持ち出し易い所に置き、1年に1度の見直しを。

(東灘区、46歳、女性)

(6) 家内の安全

阪神・淡路大震災では、家具の転倒によって多くの方が死傷されました。家具は、倒れたり、落下しないように固定しておく必要があります。特に、寝室の家具、二段重ねの家具、重い家具は注意が必要です。住まいの建て替えを考えておられる方は、つくりつけの家具の設置や壁に家具を固定するための丈夫な横木を入れてはいかがでしょうか。

① 家具

- ・我が家は全壊で家具類、電気器具類は全部だめでしたので、購入致しました。家具では、水屋（食器入れ）等は後ろの壁に取り付ける金具のようなものをもらったので、水屋の背と壁が取り付けられています。

(長田区、70歳、女性)

- ・最近は突っ張りポール等、様々な用具が市販されていますが、突っ張りポールでの転倒防止対策は、ポール面が直接天井面の下地材に当り、反対面も家具の上面の強度が十分耐えられる面に当てないと、折角の補強も効果が半減します、また、一つの家具の四隅付近に四ヶ所程度は理想です。要は、がたつかず建物と一体化させることです。できれば、建て替え時か、改築時に家具類も作り込むことが望ましいですが、既製の家具類も、床面と壁面に直接ビス等でぬいつけて、家屋と一体化すると効果的です。



(東灘区、62歳、男性)

- ・和ダンス、洋服ダンス、水屋、本棚のような大きな重い家具の前面の両端の下に、厚さ2センチぐらいのかまぼこ板のような約5センチ×16センチぐらいの板を新聞紙等で包んで置き、家具を少し傾斜させておきます。おかげ様であの地震でも倒れずすみましたが、前面に10センチ、場所によって20～30センチも移動しているのがあったらしいです。しかし、お佛壇と冷蔵庫は何もしなかったので残念ながら倒れました。お佛壇にはお茶を、冷蔵庫には水製品を入れておくので…。ご近所のお話を伺ったのですが、すべての道具を壁から10センチ離していたので、何一つ倒れたものはないとおっしゃっていました。

(東灘区、77歳、女性)

- ・設計に関しては、間取りの注意点としてダンス等一室にまとめて配置することにして、なるべく部屋には家具を置かないよう工夫した。また、ダンスのかわりにクローゼット、押入れを増やして転倒が予想される家具を減らした。

(東灘区、63歳、女性)

- ・寝起きしない室内に大きな道具、あまり使わない物をまとめて置いている(金具でとめている)。

(垂水区、69歳、女性)

- ・震災で近所の家ほとんどでダンスが倒れたり、テレビが落ちたと聞いていますが、我が家では入り口の靴箱と、タオル入れが倒れただけで、後になって思えば、部屋のすみからすみまですき間のなかったことが良かったと周りの人から言われます。いく

らタンスなど重いと言っても、この度のゆれでは、倒れてしまいます。自分の好きなように家具を置くのではなくて、すき間を作らないことを頭に入れて家具類を置いてはと思います。

(長田区、42 歳、女性)

- ・ 整理ダンスを低タイプ（高さ 80 センチ位）に替えた。

(須磨区、53 歳、男性)

- ・ 家具は模様替えの際、ガラスの食器棚を上下別々に配置したのでガラスや食器の破損、散乱が軽微に抑えられた。子どもはほとんど物のない部屋で寝ることになっていたので怪我は免れた。

(灘区、45 歳、女性)

- ・ 始めに、A. 地震時の左右のゆれはいつも南北方向である。B. 地震の水平力は建物の重量と高さ（正式には、重心高さ）に比例する。以上のことから、費用を要せず、被害を少しでも軽減するため、下記の項目を実施した。(1)家具、家財は正面を東西方向に向けて移設（但し、壁、窓の配置関係もあり、制限も多い）。(2)納戸、あるいは小部屋で、人が常時いない場所に背丈のある家具を移設。(3)重量物（本棚、書籍、冷蔵庫、大型ミシン、ステレオ、仕事用ドラクター／トラック）などを2階から1階に移設。(4)2階洋室で、フローリングとじゅうたんの間にフェルトを入れていたが、このフェルトとフローリングを一体化固定する（フローリングの上に直接じゅうたんでは、じゅうたんが家具と共に左右に移動する。摩擦抵抗が小さいため）。

(須磨区、29 歳、女性)

② 収納

- ・ 高い所には怪我をしないように軽い物しか置かない。

(中央区、51 歳、女性)

- ・ 家具等の上に物を置かない。食器類等も最小限とし棚の上はさける。

(北区、66 歳、男性)



- ・ 高い所に重い品物を置いていたが、それらを低い場所に入れかえた。

(北区、51 歳、女性)

- ・背丈大なるタンス、本棚などは、下半分に収納し、上半分は空白とする（かなり、不急不用品の整理が必要）。

（須磨区、29 歳、女性）

- ・地震だけの場合は身近な所にある机、テーブルの中に身体を入れ、頭を守ることが大切です。そのためには机、テーブルの下には荷物を日頃から置かないように習慣づける必要があります。

（宝塚市、73 歳、男性）

- ・自分の寝ていたふとんの上に人形ケース等が落ちて来た経験から、寝室にはタンスや人形ケース等を一切置かないようにした。

（西区、66 歳、女性）

- ・毎日の生活の中で一番大切なことは自分の身の回りの整理を良くして、つねにどこに何を置いているかを念頭において生活することが大切である。

（兵庫区、65 歳、女性）

- ・日頃から家の中をすっきりと片付けておく。

（長田区、72 歳、女性）

- ・余分なものを貯めこまないのが第一。

（長田区、72 歳、女性）

- ・残念なことに引越しで荷物をくくっていたことが一番の悔しさです。でも、箱にはすべて中に何を入れているのか表に書いていたので、すぐに開けることができました。今でも箱、引出しには書いているため、汚く見えますがこれもアイデアの一つと喜んでいきます。

（中央区、60 歳、女性）

- ・大切な書類の保管場所を決めておくこと。

（須磨区、31 歳、女性）

- ・家具などをあまり購入しないようにした。

（北区、51 歳、女性）

- ・平常、物を買う時本当に必要かどうか、前より良く考えてできるだけ買うのを控える

ようにしている。

(西区、66歳、女性)

③ その他

- ・震災で多くの方が被害を受けた。被害の状況により異なるとは思いますが、震災後の家の中を見回して、不要となったもの、不足しているものが、改めて目についた。例えば、我が家では子供達がすでに巣立ち、今や不要となっていたスタンドピアノが振動で横転し、地震後、夫婦だけでこれを整頓するのに苦労した。その後、ピアノは保育園などを対象として寄贈先を探したが、見つからず、結局知人に引きとってもらった。こうしたことを考えると、周辺の被害を受けなかった自治体等と協力し、住民相互で不要となったものを不足しているものと交換、もしくは、安価に売買できるリサイクルマーケットが開かれたらよかったのではないかと。この際、是非リサイクルマーケットを創設してみてもいいかでしょうか。

(東灘区、61歳、男性)

- ・私が以前住んでいた大橋7丁目(長田区)で今、環境共生を取り入れたマンション作りに取り組んでいる。その中庭に、雨水を利用したせせらぎを作り樹木を配して、トンボ、鳥等の共生を考えている。もちろん作ることは簡単なのだが、問題はこれをどう利用し管理していくかである。この中庭は広く開かれた広場であり、住民以外の人達にもその利用を考えているが、住民だけの管理ではおのずと限界がある。そこで1つの提案であるが、近くに中学校があるので、理科の授業の一環として利用して頂き、そして、池やせせらぎの清掃を住民と一緒に月に1回行うことにするのはいかがだろうか。そうすれば地域住民とのふれあいもできるし、地域でのボランティア活動にもなり、また、中庭の整備にも役立つと思うのだが…。一つのモデルケースに利用すれば、内外に向けて、神戸市として大きなアピールになると思うのだが。…

(長田区、52歳、男性)

- ・震災の時の恐ろしさ、不便さをすっかり忘れかけているこの頃。ガレキの山になってしまった神戸で、自衛隊の人が黙々と懸命に働いてくれたこと。あの若い力と人数がどれほど助けになったことか。災害の時には知事の判断を求めず、必要と思えば官公庁どこからでも自衛隊出動要請ができれば、もっと敏速にできるのではないだろうか。また、当時外国から来た救助犬が活躍したが、日本でも救助犬を警察もしくは自衛隊で育てたらどうだろうか。

(西区、55歳、女性)

- ・地震は季節や時刻を選ばない。阪神大地震は都市直下型で、その被害の大きさからす

でに大量のデータが集められている。しかし、これらのデータはあくまで1月17日5時46分に阪神地区を中心とした地震とその被害、救出、復旧などのデータであり、それは1月の寒期の早朝のものである。他の季節、他の時間帯、そして、平日、休日の差などどう変わるのか。このデータを他に活用するため、諸条件の異なる予想をしておかなければ、阪神大震災のデータは生かされないと思う。夏だったら、お昼頃だったら、休日だったら、条件の変化ですべてが変わってくる。地震は平和な心を急襲してくる。地震は何時発生するかわからない。平和な日常生活の中に突如襲ってくるのが地震である。このような非常体験は、言語では他人に伝達しきれないが、地震対策としていくら器物を揃えていても、地震の急襲による精神的な大きなショックのもとでは充分活用できない。心のショックへの平常からのトレーニングはまず不可能だが、地震対策を論じるうえで、最も必要なことだと思います。

(西区、71歳、男性)

- ・震災は不運。これを幸運へのスタートにする。仮設住宅では不満の声も聞いた。キャンプ生活と思えば楽しむ考えが湧く。慰安行事も、主催者の誠意を思えば元気が出る。顔も知らなかった方々との出会いも楽しい。被災者への物資配給。その心くばりが有難い。私は格別に宗教を信じている訳ではない。が、4年を経た今日でも仮設住宅の生活をなつかしく思い出す。私は海外引揚者である。50年前には、預貯金などすべての財産を失い着のみ着のままであった。それでも10年すれば生活が安定することを体験として知っている。不運の後、昔と同じ形の仕合せは戻らない。が、新しい仕合せは、必ず訪れる。地震の被害は悲劇ではない。試練である。この確信が私の心の復興への活力となっている。

(北区、76歳、男性)

- ・大震災の体験から、例えば交通途絶の状況下においては通勤が困難となるため、各地区での避難場所や公的施設への出向を決めておくシステムを提案します。公務員の場合は、県職員、市職員の区別なく徒歩か自転車で出勤できる公的施設を決定し、その役割もシュミレーションしておく。民間企業についても同様に、関連企業が事前に調整して、緊急時の参集場所を決定しておく。以上により、無駄な自動車等による通行がなくなり混乱が解消されるとともに、いざという時に、落ち着いた対応がとれると確信します。なお、県職員ではこのシステムを小生が提案して参集カードが配布されていますが、市との連携や民間企業とはまったく連携されていませんので提案します。

(西区、54歳、男性)

- ・災害時から災害後、医療は各個人の人脈等によって結ばれたのみで、地域あるいは機能別病院群として組織的な活動ができなかった。救急体制を整備されつつあるのは承

知しているが、より積極的な指導を望む。

例1：各病院、診療所の特徴を自らオープンにすることを指導し、市民が各自の判断で適切な医療機関を選べるようにする。

例2：医師会に任せるのではなく、神戸市自身が具体的な方法を考え作りだしてほしい。特に、自ら名乗り出て活動しようとする個人やグループに対して規制をかけるべきではなく、道を開くべきである。

例3：上記を含め、情報を交換できる場を設置し（例えばインターネット上に）、具体的な医療情報がオープンになるよう指導すべきである。

（西区、46歳、女性）

- ・災害時は道路の破損がひどく、且つ交通が混乱し、人・物の移動が長期間にわたり支障をきたした。大阪－神戸間は海上距離が短く、わが社では神戸支店の職員及び神戸市民に対する救援物資の運搬には通船、漁船をチャーターし、ピストン輸送して急場に役立てた（天保山－神戸メリケンパーク：片道約50分）。厳密に言えば、法律的には漁船の利用は問題あるかもしれぬが、非常時には行政が各漁協との間で協定を結び、各地区の漁港を利用し、交通物流を確保、利用し、且つ一般人にも活用させれば、それ相当の効果を得られると思う。神戸は漁港が細かく点在している。

（須磨区、62歳、男性）

（7）住まいの安全

阪神・淡路大震災における家屋の被害は、全壊 67,421 棟、半壊 55,145 棟（平成 10 年 12 月 25 日現在）、全焼 6,975 棟、半焼 80 棟、部分焼 270 棟となっており、大きな被害をもたらしました。特に、老朽化した建物が多く倒壊し、火災の多くは、倒壊した建物から出火したともいわれています。また、震災直後になくなられた方の多くは、住まいの倒壊による圧死や窒息死でした。

- ・北区星和台に定住して 10 数年が経ちました。台風の来襲する時期となり、わが家の屋根瓦点検を業者に依頼した。要所要所をコーティング（ボンド接着）施工した。阪神大震災で当地内の瓦葺きの家並みは、ほとんど小、中、大の損傷を受け落下し、ガレキの山となった。わが家の屋根瓦はコーティングの効果があった。

（北区、72歳、男性）

- ・倒壊していた古い家の柱は、白蟻に食われていた場合が多かったので、白蟻には普段から気をつけておく。

（垂水区、43歳、男性）

- ・被害の増大予防策の1つとして、1年に1回床下点検を実施。白蟻、その他床下地盤の凹凸部等、異常箇所(point)の点検をした。場合によっては害虫駆除をする。家屋(建物)本体の補強はコスト面で、また軟弱地盤については、既存の現況では、施工性の面で改良が難しい。従って、建物本体は原形復旧補修を目的とした。

(須磨区、29歳、女性)

- ・災害発生時の点検項目と対策及び情報として、(1)屋外部は、地盤のクラック、開所の漏水など、異常部分の点検、補修を。特に開所の異常は目視で判別できないが、漏水が発生し、気付くのが遅れることがある。(2)電気関係は、建築時期によって、サーキット、ブレーカーが設置されていない家がある。漏電時の異常箇所発見要領と対策を。(3)災害発生直後、県外の親戚、会社、友人よりの資材(シート等)、食料、医薬品の救援物資を受け取った。場所等は打合せした。深夜は中国道(東からは吉川インター、西からは加西インター)が比較的スムーズに利用できたことがわかった。とにかく、明確になったことは、災害時は、広範囲であればある程、市、県、国は我々の居住地点には、手が届かない。また、復興も公共優先で、自宅の復興は、県外に100%頼ったと言っても過言ではない。

(須磨区、29歳、女性)

- ・私の家のシャッターが自動だったので地震の時手で開けられず困りました。これから家を建てられる方は自動、手動と両方の方がいいですね。

(中央区、52歳、女性)

- ・自己の家は半壊で家屋の瓦は全部落下し、屋根瓦の地震に弱いことを知る。我が家が半壊で済んだのは庭に植えてある大木が根で地盤を強化し、対震対応力を強めたものと考ええる。

(須磨区、69歳、男性)

- ・震災9年前に自宅を建て替えた際、ハウスメーカーが地耐力を調査した結果、基礎工事費が当初見積りの2.5倍になった。大ゲンカになったが、メーカーは良心を曲げず、結局高い基礎工事費を払った。その結果、震災の被害は軽微で、前の道を通る人達がビックリして、「どこのメーカーの家ですか」と尋ねられた。当時私は病床にあったが、この家のために一命をとりとめたと言える。

(東灘区、77歳、男性)

- ・新築6年の鉄骨住宅でしたが、揺れるのは同じで音やきしみも激しいが、損壊はほとんどなかった。骨組み、基礎の大切さを知った。隣の木造文化住宅は傾き、取り壊さ

れた。プレハブは外観が画一的で安物に見えるが強い。家を建てるならプレハブでも強いが、注文住宅でもしっかりした基礎と鉄骨の家が、地震に強いと実感した。

(灘区、61歳、男性)

- ・拙宅は昭和6年に建てられた英国人の住居であった。この日本の建築家屋は、あの地震でも倒壊を免れた。この家屋の特徴は、柱が全く露出していないことである。すなわち、柱はあるが厚い漆喰（15センチ位）の壁が柱を覆っているからである。地震の際、漆喰の表面の上塗りは落下したが、漆喰は建物を支えたのである。当時、日本式家屋よりも2×4（ツーバイフォー）住宅が地震に強いという説が流れたが、拙宅の場合、厚い壁が倒壊を支えたとしか言いようがなかった。御参考までに。

(灘区、79歳、男性)

- ・阪神・淡路大震災で全壊した我が家の再建には苦勞した。北側は私道であるが、再建に際して4メートルの道路を確保するためセットバックが求められた。西の端まで6軒の所有者があり、そのうち3軒は、半壊程度で現状のまま居住を希望していた。飛び飛び家が、敷地を下げたところで何十年先に家並みがそろるか疑問である。市の緑化協会が、公道に面した塀は、生垣にして、外から見える塀をつくるように奨励し、そのための助成金を支給するとの情報を得た。ためらわず申請したところ、係の方が測量に来られ、考えていたよりも早く許可がおり、早速、街の植木屋さんに山茶花の植樹を依頼した。その請求書と引き換えに、生垣助成金を振り込んでくださった。以前のような頑丈な塀ではないが、冬のきびしい寒さの折に、可憐な花をつけ、道行く人と声かけ合う機会も増えた。よく当時のことを思い出して話に花も咲かす。絶えず情報をキャッチすることにより、家の建設にも恩恵にあずかることができ、また近隣の方との交流の機会も得た。この垣根を「ふれあい生垣」とでも名付けたい。

(東灘区、66歳、女性)

【ワンポイント・アドバイス】

安全で安心な住まいづくりのためには、地盤と構造のチェックが必要です。軟弱な地盤（かつて田・沼があった、川が流れていた、谷地であったところ）や液状化しやすい地盤（砂質の地盤、近くに川、沼、湖、海がある、地下水位が高いところ）の上であれば注意が必要です。建物の耐震診断をお勧めします。また、海や川の近くなど地盤の低い場所は、浸水被害の危険があります。また、擁壁の安全性など、周囲の状況を把握しておくことも大切なことです。

2. 地域での備え

家庭での備えとともに、地域での備えを重視しなければなりません。阪神・淡路大震災では、倒壊した家屋に閉じ込められた人を助けたいと思っても、のこぎりやバールなどがなくて困りました。また、人づてに入手した様々な情報に助けられました。近隣での助け合い、地域での助け合いを大切にしたいものです。



(1) 救援・救助

震災の経験を通して、いざという時のために、日頃から隣近所の人々と話し合っ、協力体制をつくっておくことの大切さを学びました。

お年寄りや身体の不自由な人、怪我人などに声をかけ、みんなで助け合う気持ちを忘れてはなりません。「地域の安全は、地域で守る」ということが基本です。日頃から地域で、防災訓練などを実施し、もしもの時に備えておくことも大切です。

- ・大震災発生の直後、私の頭に浮かんだことはまず、地域内から絶対に火災を発生させてはならないという一事でした。そのため、私は自宅の半壊はかえりみず、防災服、安全帽で身を固め、マイクを持って地区内全域を回って、火の元の確認を呼びかけた。と同時に、ガス暖房や湯沸かし器、電熱暖房器具等、使用した状態でスイッチを切り忘れて避難した人があったため、私は無人状態の家屋へ立入りました。元スイッチを切った家も数戸ありましたが、発見が早く事なきを得ました。平素から私たちは自治会活動の中で、防火、防犯、防災は重点的に取り組んでいます。そのため万一に備えて、地域内にABC消火器50本と防犯街灯19灯を常設、毎年1回は防火消防実技訓練等も実施していました。私は今度の大地震を契機に教訓として得たものは、大多数の人達は、万一の場合、自分自身の安全をまず最優先に考えるため、直感的に、その場所から避難しようとする自己防衛の意識が働くものである。日常生活の中では誰でも、防火、防災の重要性は認識し理解されています。しかし、万一の場合、自分自身の安全と同時に、他人の安全、周囲の人たちに絶対に迷惑をかけない実践行動が最も肝要であることを、あの忌わしい大地震の教訓として得た次第であります。

(垂水区、76歳、男性)

- ・短時間で住民に情報を伝達するためには「メガホン」を多めに自治会が準備すること。
(兵庫区、男性)
- ・平素から考え対策を立てておくこと。自治会組織の活動を円滑にし、人間関係を大切

にする。特に高齢化の時代ゆえ、不時の災難事に備え、組織内の方々の連絡先を確認する。阪神大震災では避難先は地域内の学校等が一次の避難先となりましたが、収容人員等で制限があり、第二次・第三次と考えておく必要があると感じました。私たちは、この避難先については、普段からの近隣協力が生きて、200名余りの罹災者が約2週間、近隣企業から、地下駐車場の提供を受け、助かり、今でも皆さん感謝の気持ちは忘れていません。地域内には亡くなられたり、生理めになった方もありましたが、救出のため、自治会等組織で次のものを常備しておきたいと痛感しています。ノコギリ、バール、懐中電気、携帯ラジオ、非常食等、併せて防災マップの作成。そして、「いざという時」を忘れず、二次・三次の避難先を考えて、平素より地域内の企業との交流、誠心誠意のお付合いをこころがけたい。

(兵庫区、75歳、男性)

- ・ 阪神大震災発生の日未明。兵庫区の松本地区より火の手があがり、遅々とはかどらない消火活動の中、炎は会下山地区（松本地区の北側）にも達した。私の教え子の一人の自宅にも火は燃え移ろうとしていた。入り組んだ道路事情もあり、思うように作業は進まない状況に、教え子の友人がある行動に出た。野球部に所属するその友人は、どこからか小さなビニール袋を調達してきた。近くの井戸水から汲み上げた水をそのビニール袋に入れて端をくくり、ボールのようなものを作り上げた。そして、延焼していない友人宅の壁や炎の最前線めがけて投げつけたのである。それを見たクラスメイトや野球部員は一斉にそのボールを作り、次から次へと炎に投げつけるという消火活動を行った。何時間にも及ぶ死闘の末、風向きの変加減もあり、教え子の自宅は延焼を免れたのである。『ビニール袋消火ボール』、実に有効な消火につながる道具となった。

(三田市、35歳、男性)

(2) 情報伝達

震災発生から、物資の供給や給水車などの、日常生活に関する身近な情報は主に口コミで流れたようです。正確な情報を把握しておかなければ、次の行動への判断を誤ることにもなりかねません。地域での情報伝達手段のあり方をあらためて考えておく必要があります。

- ・ 身近な情報収集ができなかったため、地域での伝達のあり方について良い方法があれば不安感がやわらいだのではないかと考えています。

(兵庫区、65歳、女性)

- ・ 阪神・淡路大震災で痛感したことは、災害に見舞われたときに、真っ先にほしいのは

正確な情報だということ。正確な情報が得られれば不安や焦りが和らげられ、次の事態に対処する心構えもできる。そこで、(1)起こった災害がどのようなものか、(2)避難の必要があるのかどうか、そして安全な避難場所はどこか、(3)ライフライン、特に飲料水の確保はどうすればよいのか、(4)鉄道や道路の状態はどうなっているのか。ラジオ、テレビなどによる情報は報道として現況の伝達が中心であるが、市民が求めるものは、それプラス、地域ごとの詳細な情報であろう。それには行政当局からの迅速な情報がどれだけ必要であり、かつ心強いものかということである。それにもまして、住民どうしの情報も重要である。そのために、日頃から、地域住民の融和と親睦を目的とする自治会などの組織の活動に積極的に参加することも、おおいに役立つであろう。平時から、災害時の情報をいかに、正確かつ迅速に地域住民に伝達できるかを心掛けておく必要がある。

(長田区、61歳、男性)

- ・突然の災害に混乱は当然のことながら、日がたつにつれ、食料品の支給とか、水の補給とか、周りの口こみで知る状態で自治会からの連絡等は全然なかったように思われます。もう少しきめ細かい連絡網があったら、隣近所の人とも平等に分け与えられたものと思います。このごろは、地域のふれあいまちづくりと盛んにいわれておりますが、人と人のふれあいはその人によってずいぶんむずかしいものと思います。こんなことは二度とあってはならないと思いますが、身近な情報収集が一番頼りになると思います。

(兵庫区、68歳女性)



- ・学校での避難の時、各教室の前に名前、住所がわかるようにすると良かったのではないかと思います。(会いたい人を捜すのに大変でした。)

(中央区、52歳女性)

3. 災害への心構え

家庭・地域において物資等を準備しているだけでは、万全とはいえません。日ごろから身の回りの安全を心がけるなど、いざという時でも、冷静沈着に行動するための心構えが必要です。

(1) 情報収集・情報確認

阪神淡路大震災発生時、神戸市内では、ピーク時には 589 ヶ所の避難所に 236,899 人が避難しました。災害時に備えて、避難場所や避難経路を確認しておくことはとても大切です。実際に自分の足で歩いて、自分の目で、確認しておけば、災害時にあわてることはありません。また、バス停や自動販売機、お店、公共施設、掲示板等の場所・経路を確認しておけば安心です。

- ・避難場所、安全な所を実際に見て確認しておく（行き止まりに入らない）。
(垂水区、73 歳、女性)
- ・避難場所を事前に確認しておく。
(須磨区、31 歳、女性)
- ・居住近辺の商店マップを手に、東西南北約 3 キロメートル四方位まで、何がどこにあるのか（自動販売機等を含む。）を把握した。
(須磨区、53 歳、男性)
- ・交通手段のバス、電車がストップした時を想定して、一駅向こうの駅や停留所まで、実際に歩いてみる必要があります。震災以前に、歩く会に入って、あちこち歩いていたため、あまり抵抗もなく歩いて、必要な場所へ出かけることができました。
(須磨区、65 歳、女性)
- ・日常いつも情報には気を配ること。自分の身は自分が守らなければいけない。神戸の被害の様子を、情報を通じて知り、また自分で歩いて確かめる。自分でできることがあれば、考えて行動する。
(兵庫区、73 歳、女性)
- ・小野市へ避難中ありがたかったことは、広報「こうべ」をはじめ広報紙の送付をいただいて、行政の避難者に関する各種の情報を、常に承知できたことでした。
(須磨区、77 歳、男性)
- ・広報を聞きのがさないようにする（車で回って来られたそうだけど聞こえないことが多かった）。
(垂水区、73 歳、女性)

(2) 安全確認

阪神淡路大震災の場合、地震は早期に発生しましたが、すでに多くの人が調理や暖房で火を使用していました。しかし、震度7の激震のなかで火元確認もできなかった人が多く、各所で火災が同時多発するという事態を招きました。電気製品等が火元となることもあります。ガスコンロやストーブだけでなく、電気にも注意が必要です。

- ・絶対にタンス・家具の前には寝ません。倒れたタンスの引出しの間に首がはさまれて、死ぬ思いのこわさ、忘れられません。

(東灘区、64歳、女性)

- ・震災後を振り返ってみると、簡単そうに見えて実際にはなかなか難しいことが数多くありました。まず、ガスの元栓の問題です。日頃より元栓を止める習慣をつけておくことが大切であると感じました。なぜなら、地震と気付いた時には身体の自由がきかなくなっていたからです。

(東灘区、73歳、男性)

- ・逃げる時には、家の配電ブレーカーを切ることを守りたい。地震より、あとの火災が恐いです。近くですぐに火災になりました。

(東灘区、64歳、女性)



- ・家族の集合場所を決めておくこと。

(灘区、45歳、女性)

- ・防災の基本は「自分の安全は自分で守る」ことであり、自己責任範囲が大きいことを普段から家族全員に周知徹底させておくことが必要。

(中央区、71歳、男性)

- ・ちょっとおかしいなと思ったらすぐに手当てをすること。身体であれ家であれ、ささいな事が起きた時、ちゃんと手入れをすると突然大事故が起こっても、生き残れるものだと思う。そして今自分に何ができるか、できることを小さくてもいい、確実に積み重ねていくことだと思う。自分の生活の範囲で背伸びをせずの一つずつ片付けていく…。普段の行いが一番大切。それが回りまわって大変なときの自然な皆の協力というか関係が私を支えてくれたと思う。

(中央区、47歳、女性)

(3) 人とのつながり

あの震災の経験を通じて、いざという時にこそ、人と人との信頼関係やつながりが大切であることをあらためて強く感じた人は多いと思います。ここでは、震災から復興への道のりで、人のやさしさに触れ、他人への理解・共感の大切さに気づいたというみなさんの体験談をご紹介します。

- ・重要なことは、何事にもお互いがあってこの世に生まれて、縁あっていろいろな人々とつながりを持って生活をしていることです。日頃から仲良くやって行くように心掛けておくことです。そこに、いざという時にはお互いの間に大きな力が生まれてくると思います。

(垂水区、72歳、男性)

- ・私は、現在住んでいる所に高校一年生まで住んでいたのですが、その後菊水町10丁目(兵庫区)に引越し、その間今の住まいを人に貸していましたが、地震で全壊したため、再建し再び住むことになりました。昔、住んでいたとはいえ、知らない人が多く不安でしたが、幸い、町内での溝そうじ(6月～9月第1週日曜)、年1回のもちつき大会、地藏盆の行事で町内の方と顔を合わせるにより顔見知りになり、行事に積極的に参加する動機づけになりました。そういう意味で地域づくりには、行事を幅広い地域の方々に盛り上げる必要不可欠です。

(兵庫区、40歳、男性)

- ・私の地域では、被害があまりありませんでしたが、水道が長い間出なくて困りました。私と娘はその間お風呂にも入れませんでした。そんな時に知人から「入りにおいで」と言われてお風呂に入れてもらい、しみじみとお湯の感触に浸りました。困った時にお互いが助け合うためにも、平素からの隣近所の付き合いが大事だと思います。

(須磨区、51歳、女性)

- ・震災にあって、一時的に大阪に避難。元々住んでいた十三へ行きました。初めの2日はとりあえずホテルに泊まりました。その日の夜、母の友人で私の”近所のおばちゃん”でもあった人が、たくさんの食べ物を用意して部屋に来て下さった時はとても嬉しく思いました。そして、住む所を探している時、母が昔、勤めていた会社の同僚の方に団地の一部屋を使わせていただきました。とても運が良かったと今でも思っています。それもこれも、母の人の良さというか、長くお付き合いを続けようとする気持ちから来たものではないかと思っています。最近では、あまり会話したり、親しくなる

ことって少ないと思うんですが、やっぱり、できるだけ人とは仲良くしている方がいいと思います。いざという時には、普段からの自分の接し方が、如実に表れてくるのではないかと考えます。助けていただいた方には、本当にいくら感謝しても足りないほどです。そして、私も、もし誰かに何かがあれば、手助けをしたいと思っています。震災は、いろんなことを考えるチャンスにもなったと今では思えます。人の優しさに会えなければ、こうは思えなかったと思うのも本当ですね。

(垂水区、27歳、女性)

- ・私は、地震が起きて、近くの大学に避難しました。そこには、顔見知りの方ばかりでなく、近くに住んでいたのに全然知らない方もいました。私はそこに避難していた方々みんなと仲良くなりました。今でも手紙のやりとりをしたりしています。その手紙には、「あやちゃんが私たちの励みでした。あやちゃんは私たちにとって天使のような存在でした。ありがとう。」と書いてくれていました。その人は、老夫婦でした。私は避難していた方たちに別に特別なことをしたわけではないです。ですから、はじめはなぜ感謝されているのか分かりませんでした。でもよく考えてみると、その方と顔見知りだった訳でもないのに、いっぱいいろんな話しをしていたことに気が付きました。たくさんいろんな話をすることによって、「きっとその人たちの心が和んだんだ。」と思いました。私の笑顔で元気になってくれた人がいたんだと思い、すごくうれしくなりました。私はこう考えました。お年寄りの方といっしょに、何日間か過ごして、いろんなお話しをしたり、いっしょに散歩に行ったり、自由に過ごせる、ふれあいの場をつくって、広告などで呼びかけて募集したりしてほしい。お年寄りの方も、自分も楽しめると思います。是非お願いします！

(長田区、15歳、女性)

- ・震災時や復興への道りで頼りになった人は、災害をしっかり把握し、かつ行動的だった自治会長さんです。幸いこわれなかったお宅で炊き出しをして下さり、また、伝え聞いた他府県からのボランティアが応援にきて、炊き出しをして下さり、各家庭を回って屋根のシート張り、飛び散った雨戸入れ、ゆがんだサッシをなおして入れてくれたり。一番大変な時に本当に不自由なく過ごせました。

(東灘区、63歳、女性)

- ・自治会の会長、役員は、名誉職ではなく、実際に「いざ」という時にすぐ実行できる人でなければならない。その意味からして昔あった隣組的な組織が自治会の下になければならない。

(兵庫区、男性)

- ・私の家の前には1,000坪ほどの公園があります。震災時はたくさんのボランティアの人がこられました。私の家には井戸があるので、洗濯機を2台出して皆さんに提供しました。皆さん大変喜ばれました。震災前は公園の掃除を市まかせにしておりました。震災後、主人が自治会長を引き受け、公園の掃除を町内でするようになり、地域の皆さんも積極的に参加されています。公園内に花壇を4ヶ所作り、花を植えて、地域の皆さんにとって交流の場、いこいの場となっています。震災前は、ゴミや空き缶があちこちにちらばっていましたが、今はみちがえるようにきれいになりました。夏にはラジオ体操、盆踊り、また若いお母さん方のフリーマーケットと、公園を中心に地域のみなさまとのふれあいが活発になっております。公園内に自治会館建設を計画して今進行中です。これからも地域のみなさまとともに協力しながら、高齢社会に向かってくらしやすい地域にしたいと主人とともに頑張っております。

(東灘区、57歳、女性)

- ・復興のために一番役立ったことは震災地以外の親族、知人などから寄せられた物・心両面による支援でした。特に、県市による各種支援が役立ちました。急に人間関係をよくすることはできないので、平素から遠隔地であっても、親族、知人とは可能な限り仲良く親交をもつことが大切だと身にしみて感じております。

(東灘区、73歳、男性)

- ・私は、震災前は隣近所との付き合いは余りありませんでした。震災後、近所のお寺さんに2週間程度お世話になりました。昼間は家におり、毎日毎日、掃除と片付け。そして、水道の復旧までの毎日の日課が水汲みだったと思います。また、ガスが駄目だったので電気ポットで湯を沸かしたものです。みんなが自宅に帰られる頃、やっと近所の人顔を覚えられたと思います。今はお寺さんと一緒に世話になった人とは一部の人しか会うことができませんが、これからも近所の人との付き合いは大切にしていきたいと思います。今年自治会の役員をして、近所のふれあいに協力しています。生活が落ち着いてもやはり忘れないもの、それはその当時世話になったお寺さん。生涯の私の思い出に残していきたいと思っています。

(兵庫区、57歳、男性)

- ・地域社会での体験学習を通じて、生きる力を養うことを目的とした教育活動である「トライやる・ウィーク」が兵庫県下の中学2年生を対象として実施されている。地域の方々と一緒に活動することで人とのふれあいを通した心の教育へと広がり、更に、自らも地域の中で生きづいている一員であるという意識の芽生えが、地域と家庭と学校をより深くつなぐ地域活性化と教育の充実に向けた糸口となってこよう。鈴蘭台中学校(北区)の2年生では、6月上旬に行われた「トライやる・ウィーク」で「防災

マップ」作りを手がけた。自治会の協力の下に、生徒たちが自分たちの住む街を自らが歩き探索し、送水口（消火栓）の設置場所やその数、緊急時に備えての公衆電話の位置、そして、崖崩れ等の危険地域の実態調査を行い、この結果報告を受けて、写真入りコメント付きの「防災マップ」を作成した。自らが生命を守ろうというこの取り組みは地域のコミュニケーションを高めると同時に、防災に対する心構えの重要性を体験から学ぶことができた。21世紀を担っていく若い力が防災への関心を持つことで尊い生命が守られる一端となるよう願ってやまない。後日、この「防災マップ」を使っての地域での発表会も行われ、賞讃の拍手とともに大きな評価を得たことは生徒たちのかけがえのない財産となったであろう。

（三田市、35歳、男性）

4. ボランティア

地震直後から多くのボランティアの方々が神戸にかけつけていただき、どれだけ心強かったことか。また、被災した市民自らもボランティアとして活躍。「ボランティア元年」という言葉も生まれました。

・「ありがとう、お元気で。また、来週ね！」活動を終え、住民の方々と手を振りながら、ふれあいセンターを後にしたのも、つい先日のように思います。平成7年11月、やまとボランティアの一員として、大和公園仮設住宅（灘区）の皆さんと交流を持つこととなりました。高齢者、障害者を対象とした住宅で、発足時は、250世帯もありましたが、建設が進んでいく復興住宅への転居と、一人ひとりが求める新しい生活への道に住民の数も次第に少なくなり、平成11年7月、仮設での活動は終わりとなりました。振り返れば、私にボランティアができるのだろうか。ボランティアって何をすればよいのだろうか。不安と戸惑いの気持もありましたが、皆さんとお茶やお菓子を手にし、笑ったり、歌ったり、世間話しに花を咲かせたり、また、時には、悲しい話しに涙したことなど、今は過ぎ去った日々がなつかしく思い出されます。「また、会いたいね、また、元気で会おうね。」一人ひとりの交わす目と目、堅く握りしめる手のぬくもりに、震災で受けた心の傷は、同じ人間として、生きていることの喜びと、生きることの大切さ、またお互いを思いやる心をも教えてくれたように思います。そして、一人ひとりの出会いがよき思い出となり、生涯忘れることなく、心の糧となることと確信しております。このボランティア活動の教訓と経験を通して、人と人との結びつきを基盤としたボランティア活動への参加と、地域社会への助け合いの大切さが再認識され、これからの自分自身の活動の道として展開していきたいと思っております。

（灘区、64歳、女性）

- ・環境の良い町、豊かな町、災害の少ない町、神戸はとても住みやすいところと思って安心して 35 年間住んできて、突然の地震に遭ってハッと気が付きました。すべてのことに甘んじて過ごしてきた自分に…。世間に目をむけると、さまざまなことが起きている。自分で立ち向かって行くために何から手をつけて行けばよいのかを考え、模索しながら少しずつボランティアをしています。ボランティアを細くても長く続けるためには健康でなければなりませんので、体を鍛えるために運動をしています。体育の指導をして下さる先生がいらっしゃるののでうれしく思っています。それと、区役所からのふれあいハイキング等の参加を楽しみにしております。

(兵庫区、63 歳、女性)

- ・「震災の時、近所の一人暮らしのお年寄りが外に飛び出してみたが、誰も出てなかったの、恐ろしかったが家にもどった。」と言っておられたのが心に残っています。その後、地域の人達が集まりお互いに励まし合おうと、マクラメ編みのプラントハンガー作りの会を指導させて頂き、大変好評で、それがピッコロ手芸サークルに発展していきました。災害がなくても地域の人々が楽しく集い合う機会を持つことは大切です。その後高齢化が進む中、地域の内、外でのボランティアグループがあればと話してみたのですが、結果は散々でした。提案するタイミングも考えなければと思いました。

(垂水区、64 歳、女性)

- ・1月17日夕方、西灘小学校(灘区)へ避難する。ほとんどの人が放心状態で教室の中でうずくまっていました。18日夜、マイクでボランティアの募集、私は60歳を過ぎていたが、電話の受け付けであればできると思い参加しました。夜、先生方が体育館、教室、廊下、階段と回り、住所、名前を確認して、翌朝若い人の力でパソコンに入力し名簿を作成。一方、職員室の2台の電話は鳴り放し、北海道から沖縄まで全国から、1日2,000件程の身内の安否問い合わせがありました。電話受付は、4時間ローテーションで、1台に4、5人がかりで受け付ける。避難者の私達が参加したことにより問い合わせの時も名簿にない時は住所を尋ね、その近くの避難所の電話番号を2~3ヶ所教える。パソコン席に人がおれば、大きな声で検索してもらって、電話番号を2~3ヶ所教えるといった電話対応をしておりました。名簿は、職員室の前の机に4、5冊置き、訪ねて来た人に各自でみてもらう。呼び出し電話は一切なし。大きなプラカードに名前を書き、若い人達が大声で体育館教室等を回り、こちらから電話するように伝える。3、4日すると、児童の親戚その他へ避難先の学校や教育委員会より続々と電話連絡があり、先生方も名簿にチェックし、安堵される毎日。夕方7時に職員室にて、スタッフ会議、各所(炊き出し、電話、物資受付等)のボランティアスタッフが集まり、反省会、希望等々の話し合い。学校の先生方のほか、県外からの

ボランティアも加わっていました。若い人のリーダーが出てきたので、西灘小学校避難所は運営が良くいったと自負してます。女性の校長先生だったことも、良かったと思います。

(灘区、67歳、女性)

- ・あの地震が発生した時は、子供たち（長女、長男）は共に高校生でした。発生した日から、学校は休校となり、私の方は職場（元町）に連続の泊まり込みの状態でした。時折、家のように心配で家内と電話で連絡をとりましたが、「子供たちは、自発的に校区内にある神戸市立外国語大学の緊急援助物資等の荷物の積み降ろしのボランティアに従事している。」との状況を聞き、胸に熱いものが込みあげてきました。私たちの住んでいる西区学園都市は、幸いにも大した被害も無かったのですが、子供たちが学校での学業だけでなく、地域の震災救援ボランティアに自主的に参加し、朝から夕方まで、神戸市民として被災市民のためにこういう形で頑張ったことは、人生を生きる上で大切なものを身をもって学んだことと思います。この貴重な体験を忘れることなく、後世へ語り継いで欲しいと思っています。このような広域的な大災害時には、中・高校生の自発的なボランティアを積極的に展開していただき、学校教育の中に「ボランティア活動」を根づかせて欲しいと念ずる次第です。

(西区、51歳、男性)

- ・震災を体験してから何か人のため、町のために私にできることないかしらと思いました。お年寄りの方が大勢いらっしゃり、週に一回だけ一人暮らしの家におじゃまして、掃除してお話し相手になっています。もう一人の方は、月に二回ほど「お元気ですか。」と電話しています。歩いていると、人それぞれ、溝掃除されていたり、自分の身近な所を掃除されていたり。みんな思うこと同じなんだなあ…。

(長田区、50歳、女性)

- ・私は2年前から、神戸市の「まちかどエンターテイナー」の特技ボランティアとして、中央区のボランティアセンターに登録し、住民の皆様の似顔絵を描かせてもらっています。古くから住みなれた町がだめになり、仮設は出たものの、新しい町にまだまだとまどっている人、近所づきあいにまだ心が開かれていない人が多いと思います。私はボランティアの仲間とそんなぎこちない町を、早く昔の下町のような明るいものにしたくて、ささやかな楽しみを提供させてもらっています。街も人と同じで、早く心の復興を見せたいものです。それには、たとえ物は豊かでなくとも、心のつながりが豊かにならねばなりません。心のつながりのためには、住民の皆が友達になることです。

(兵庫区、48歳、男性)

第2章 まちづくりの提案

復興の体験を通じてみなさんがつちかわれた身近な知恵やアイデアのほかにも、安全で安心なまちづくりのための提案を、多くのみなさんからお寄せいただいた。一人ひとりがわがまちのことを思う気持ちからまちづくりは始まります。

(1) ライフライン

- ・震災二日目になって給水車が来るというので指定場所へ行くと、バケツややかんを持った人の列ができていました。午後3時頃になっても給水車は来ません。一度家に帰ったところ知人から500メートルほど先の旧農家に井戸水があり汲ましてくれとのことできっそく行ってみると、井戸に電動ポンプを取付けて汲上げ、皆に給水していました。若い人は車で遠くへ水を貰いに行っているようでしたが、私たち老人はそれができず、本当にありがたいことでした。そこで思うのですが、こうした井戸を行政が力を貸して残して置くことも必要ではないかと思います。人工貯水池（耐震性貯水槽）もできますが、あそこも、ここもとはできないと思います。その場所へ行くための道路事情もあるので、机上計算のように行かないことも考慮に入れてほしいです。

（垂水区、77歳、男性）

- ・災害のためという訳ではないと思いますが、町内に何軒か井戸を掘っているお宅がありました。自分の町内は、4月頃まで水道が復旧せず、たいていのお宅が、井戸の水を分けて頂く状態でした。「飲むにはあかんで。」とか言われながらも、トイレ等で非常に重宝しました。土地的な事情は大きいと思いますが、こういった井戸等を公的機関が持っていればそういった所で役に立つのでは。

（兵庫区、26歳、男性）

- ・人間が生命保持のため飲料水が必要なことはご承知のことと思う。先の阪神大震災でライフラインが止まり、飲料水の確保が急務であったが、幸い近くの寺院が井戸（飲料水）を開放してくださり、大変有り難く感謝しています。そこで大災害に備え、地下水資源の確保と井戸（飲料水）所有者の保護と育成をお願いしたい。これは災害からの知恵である。ちなみに雑用水は小学校のプールの水を使用した。

（垂水区、男性）

- ・公共施設には必ず貯水槽の設置を!!人間が真っ先に必要なものは飲料水。そこに行けば必ず飲み水は確保できるという工夫が重要である。公共の建物、公園、公道の一部に、常時は心安らぐ噴水やせせらぎなど備え、非常時は飲料、消火用に転換できる貯

水槽の確保を。

(北区、63歳、女性)

- ・ 防火用水を駐車スペースの地下に設置するために行政から助成してほしいと思います。雨水が何にも利用されず海に流れ出るのは、とてももったいないと常々考えていた矢先の震災での消火用の水不足。耐震性のある水がめを、住宅の駐車場の地下につくれないだろうか。費用がどれ程かかっても、火事や干ばつの時に利用する水として役立つならばうれしいのですが。マンションの管理組合の理事長として痛切に感じています。各マンションに必ず雨水がめがあるなら、震災後、ニョキニョキと数が増えたマンションは、近隣の水がめとして役に立つと思います。

(東灘区、57歳、女性)

- ・ 今の生活は、水がなければ何もできません。行政で雨水の利用をもっと考えてほしいと思います。外国の人に言われて気が付いたのですが、飲み水でトイレを流しているのは日本だけだそうです。

(西区、53歳、女性)

【ひとロメモ】

神戸市内には、東灘区の住吉公園をはじめ、一部の小・中学校などに雨水の貯留施設があります。貯留しておいた雨水を手回しポンプでくみあげることができるようになっていきます。消防用水や公園内植栽への散水、道路の清掃用水、災害時の仮設トイレ用水にも利用できます。

- ・ 水の大切さしみじみ身に染みた。特に水洗トイレの水!!もったいない。飲み水と区別はできないものか?

(長田区、56歳、女性)

- ・ 震災で気がついたことは、水、ガス、電気、電話、その他が使えなくなってしまうこと。そのためにアイデアとしてお金がかかるとは思いますが、土管を地下に埋めて、その中に水、ガス、電気、電話、その他を入れてしまえば、復興も早くまた、全市民の人にもわかってもらえると思います。一度神戸市として検討をお願いいたします。自動車の道も広がります。

(兵庫区、63歳、男性)

- ・ 大震災に遭遇して、ライフラインの復旧の度合が災害被害を大きく左右したものと思われま。長田地区、東灘地区の大火災も消火し得なかった消火用水施設不備、電柱

倒壊、スパーク断線による長期停電と通信障害、ガス管損壊等により市民生活がたちどころにストップ。終戦時の悲惨さを再び味わった感じでした。幸いにも電気の復旧が1週間ぐらい、他の水道、ガス、通信は2～3週間、地区により1～2ヶ月と災害被害の程度により差はありましたが、生活に直結するライフライン対策こそ、危機管理、防災管理の重要基盤と思われまます。ライフラインの堅固配管による地中化、防火用水槽拡充が望まれます。とにかく、ライフライン対策は当該企業のみ負担では万全な対策は講じ得ないと思われまます。市当局としても、これら当該企業と密接連携しあって、都市の社会基盤としての施策を講じてもらいたい。

(垂水区、68歳、女性)

- ・地震にしろ、水害にしろ、一番困るのが普段の生活ができなくなるライフラインのストップです。世界の大都市で電線や電話線が空中を走っているのは、アジア、中でも日本や中国が目立つようです。これらを暗渠に統一する案はずっと以前からあったように思います。この際、ライフラインを暗渠に統一して、保守管理のしやすいものに変えて下さい。

(長田区、74歳、男性)

- ・今回の震災でいろんなことを体験しましたが、空気はもとよりいかに水に依存して生活しているかを改めて知りました。普段、あたりまえと思っていた水がいかに大切か貴重か、そして決して作れないものということを実感しました。まず、水を確保する、1) 雨水を蓄えること、2) 風呂の残り湯を安易に捨てない、3) 海水の利用、4) 飲料水をやかん1杯必ずとっておく、これらのことを工夫しています。海に面している神戸市、このなみなみとある海水を何とか利用できないものかとあの時(震災)以来ずっと考えています。

(垂水区、64歳、女性)

【ひとロメモ】

震災後、海水や河川等の自然水利を消火用水として活用できる「大容量送水システム」が北・西を除く各消防署に配備されました。これは、大容量ポンプ車1台、ホース延長車1台、口径100mm消防用ホース180本が1セットとなります。写真は、従来の消防車の2倍以上の水を吸送水できるポンプと2トン水槽を備えた大容量ポンプ車です。

- ・今回の震災で水がこう長い間断水になろうとは考えなかった。火災で消火の水がなかった。飲料水はもとより、便所を流すことに困った。噴水の水、駐車場のスプリンクラーの水を利用した。川の水が利用しにくかった。何故か川に下りられない。北区では、消防団は川の水を利用し、また、山上までポンプをリレーして上げている。市街

地では川を利用したのであろうか？川の所々にポンプアップ用の穴をあけておき、時々、土砂とゴミを取るようにすればよい。次は受水槽の利用で、その団地だけでなく地域で利用できるようにしたらと思う。

(垂水区、68歳、男性)

(2) トイレ

- ・ライフライン（電気、水道、ガス、電話、下水道）の寸断対策とあわせて、簡易トイレの緊急配置、行政上の復旧対応をお願いしたい。

(兵庫区、75歳、男性)

- ・トイレは、簡易トイレの開発を。また、公共トイレの設置（一町ごとに配置）を。

(西区、42歳、男性)

【ひとロメモ】

災害時に避難所となる小・中学校等では、汲み取りのいない公共下水道利用型仮設トイレが順次整備（60ヶ所）されています。これは、大災害が発生し、ライフラインがストップしても、プールの水や貯留しておいた雨水を利用して下水道本管に直接放流するというものです。

(3) 広報

- ・避難している方は情報がよく入りました。家にいたものは何もわからないことがたくさんありました。昔の火の用心のように、車で放送して今どんな様子かを知らせても良かったかと思います(地域のお世話して下さいの方々も大変でしょうが…)

(中央区、52歳、女性)



- ・あのとき、身近な情報の入手は近所の人々からで、水がどこどこにあると教えてくれるのは皆、市民だった。私は思うが、市役所の広報車などで早く知らせに来てほしかった。

(中央区、65歳、男性)

(4) 避難場所

- ・「この住所なら避難場所はここ」と、住民も分かっていないと思います。たとえば、選挙の投票のハガキにでも、「あなたの避難場所は、〇〇小学校です」と書いてあれ

ば、いいのではないかと考えています。また、駐在所では、どこの家には誰が住んでいる、というリストがあるのではなかったでしょうか？そのデータを災害時に役立てることができればと思います。災害があった時は、避難場所でそのリストに基づいて点呼ができればと思います。そうすれば、災害地の安否を気遣う人は、点呼の結果を決められたところへ問い合わせれば、安否の確認ができると思います。そんなリストがあれば、各地の避難所で備蓄する物資の量も無駄なく計画できるのではないのでしょうか？



(須磨区、37歳、女性)

【ひとロメモ】

神戸市では震災後、市内の指定避難所となっている施設の出入口付近に、指定収容避難所である旨を記載した看板を順次設置しています。この看板には、日本語・中国語・ハングル文字で「避難所」と表示しています。

(5) 物資の備蓄

・倒れた家屋の下敷きになった人の搬出には携帯用ハンドソーのこぎりが有効です。行政でも検討のうえ、各自治会等に配布してはどうか。ジャッキでは時間を要する上、場合によると下が沈んで柱が持ち上がりません。ハンドソーのこぎりは短時間で柱の切断ができ、通常ののこぎりに比べて有効であった。

(須磨区、62歳、男性)

・地震発生時、私は被害甚大であったJR新長田駅南部（長田区）に住んでいました。発生から時間を追うごとに被害が増大、増幅していった様子をご存知の通りです。私も全壊した古い我が家の下敷きになり、幸い2時間後に息子たちにより救出され、九死に一生を得ました。近隣の様子は大同小異で、お互いに道具もない状態のなか、素手で救出し合いました。その後、周囲は火の海となるのですが、この時思ったことは、町内の小単位の防災体制と防災具の備蓄の必要性です。あの場合、消防その他はあまりあてになりませんでした。小回りのきく、小単位の防災を考えていく必要があると思います。

(長田区、83歳、女性)

【ひとロメモ】

神戸市内の各地域で、市民、事業者の皆さんと、行政とが協力し合って、安全で安心なまちづくりに取り組む防災福祉コミュニティの結成が順次進められています。神戸市

では、この防災福祉コミュニティに対して、バール、のこぎり、スコップ、布バケツ等の防災資機材の整備を支援しています。

- ・1995年1月17日の大震災の時は、全く予期しなかつただけに、直後丸一日は食事ができなかつた方が多勢おられました。私は、近くの米屋でお米を20キログラム買入れ、近くの空地で炊き出しをして地域の方におにぎりをお配りしましたが、とても全部の方にはいき渡りませんでした。何ととっても「水」が無いのです、米だけではどうしようもありませんでした。この経験から、せめて「おにぎり」ぐらいは被災者にいきわたる方法はないかと考えました結果、次のようにしたらと思いましたが提案します。お米と飲料水を地域で確保できれば、鍋、燃料等は、私の経験から何とかあります。非常米の確保（各自治会単位で）と、飲料水の補給を行政としてお考え願いたい。消防用水は、行政も考えておられて、それ相当の対策はとっておられると思いますし、個人等も浴槽に水を常時入れておくなどはできます。

（長田区、76歳、男性）

- ・避難場所には学校等が多く考えられますが、毛布、簡単な食料、水は備蓄してほしいと思います。その場合、食料・水の賞味期限の問題があると思いますが、それは、たとえば、毎月17日を「防災の日」に指定して、学校の給食等で食べて行き、減った分を順次補給していけば、安心なのではないかと思えます。

（須磨区、37歳、女性）

- ・大雨などによる水害、土砂災害等は事前にある程度予測ができて、避難時には持ち出しができるが、大地震の場合は瞬時にして家屋が倒壊するので、運良く助かっても身一つで脱出しなければ、続く予震で埋まる恐れもあり、持ち出し品を横に置いていてもそれを取り出せないのが私の経験から言える。従って、地区で避難場所に指定されている学校や公民館等に、スペースや管理の問題などいろいろあるとは思いますが、緊急用の倉庫を置き、毛布、衣類、食料、医薬品等々を常備されるようお願いします。管理は各自治会が責任を持って行うこともできると思います。

（須磨区、68歳、男性）

（6）救援物資

- ・団体、個人からの支援物資については、衣料、食品等に区別して梱包し送付してもらう。また、受入場所は、搬入、搬出に便利な場所を事前選定し、必要人員も確保しておく。今回、物資仕分けのボランティアに従事したが、次々に搬入されるダンボール箱が山積みで、開くと食品、衣料、家庭用品等が一つのダンボール箱に入っており、品目別にするのに日数がかかり、中には保存期間が過ぎ、悪臭を発生し廃棄するもの多

く、申し訳なく思いながら処分した。今後は早く必要な人々に渡せるように、災害への備えとして準備体制を確立する必要があると思います。

(北区、75歳、男性)

(7) 仮設住宅

- ・仮設住宅の抽選方法？「お年寄から」「お年寄を大切に」は良くわかるが、結果は年寄りばかりの街になって孤独死や不安があったと思う。若い人や子供たちがいて、にぎやかに過ごせばお年寄りもそれなりに気も紛れたのでは？

(長田区、56歳、女性)

- ・仮設入居時、新品洗濯機ほか家電製品の盗難事故が多かった。被災者を食い物にする悪徳業者。必需品のため、再度購入。後日盗品が判明するも、新品ながら梱包がないため業者は引取らず、嫌な思いをした市民もいた。対策として、非常時のこととて、かかる問題にも対応指導または補償があってもよかったのではないか。

(須磨区、70歳、男性)

(8) 建物の耐震化

- ・この大震災で多くの犠牲者を多く出した原因は、老朽、手抜き建造物に寝ていた人が瞬時に圧死、あるいは圧迫状況のままの焼死でありました。この惨事をくり返さないために、建造物の強度を保障する制度を設けるべきであると考えます。例えば、車検制度によって自動車の安全性、強度、耐久性が事故を除いて強制保険により保障されているように、建造物についても、その所有者に対して強制保険と定期検査を義務づけることによって、建造物の安全と強度、耐久性を保障すべきではないかと考えます。当然、税、社会保障諸費の重圧に加えて、各種の任意保険や来春からの介護保険等の更なる負担増の中で、即全国民的合意を得ることは多くの障害と抵抗があることは当然であるものの、年々必ず繰り返される天災による物的被害と人的犠牲を最少限に止めるためにも、税の配分と融資制度の見直しと、応分の負担の必要性を全国民的な合意形成に向けて呼びかけ、有識者、実務者による制度化への取り組みを願うものであります。すでに不良手抜き建築に対する点検制度はあるものの、現実を見据えて真剣な論議と研究の開始を強く望むものであります。



(兵庫区、71歳、男性)

(9) メモリアル

- ・地震の後のことを思い出して、1月17日を節約の日、またはゼロからの出発日にして、原始時代に戻ったように、できるだけガスや電気を使わない、車・電車にも乗らない、お金を使わない、あるもので食事をする、ゴミをできるだけ出さない、こんな日にしたらどうですか。

(垂水区、67歳、女性)

- ・サバイバルの訓練を。今回の震災で痛感したのは、あまりに平穏無事な月日にドブツリ漬かってまさか!!の時の心の訓練や、日常の災害の訓練ができていなかったこと。戦火をくぐり抜けてきた戦争体験者から見ると、人間の弱さが全部マイナス面で現れた。だから今後は貴重なこの震災体験を生かすために、最低年1回は、風水害、火災、震災、事故発生(例えば、ガス爆発、大規模停電など、地下街などは特に!!)等に備えた市民全体のサバイバル訓練が必要。特に心理面の鍛錬が必要だ。

(北区、63歳、女性)

- ・神戸生まれの私にとって、阪神大震災はとても衝撃的なでき事でした。あれから四年七ヶ月余り、キラキラ素敵な顔が戻りつつあり、都心はあの悲しい惨状がうそのような活気のある街に姿を取り戻していました。美しくなっていく街並みとは裏腹に、あの震災を風化させないために、いたるところに当時を思い出させてくれる場所がありました。メリケンパークにあるメモリアルパーク、異人館の煙突など、そのうちの一つです。どうしても忘れてはいけないものですよね!!



これから生まれてくる子供達にも、震災の恐ろしさをみせてやりたい。震災を忘れず、教訓を後世にのこそうとする願いをぜひ形として残してほしいです。今神戸は花と緑で彩られています、ここまでこられたのも市の職員がみんな必死でがんばってきたからだと感謝いたします。これからも、おしゃれな美しい街でありつづけて下さい。

(三木市、57歳、女性)

- ・垂水区の山手にあります桃山台は震災の被害も少なくすみ、ガスや水道の不便はありましたが、命があることを何よりもありがたいと思いました。同時に命を新たに授かったような気持ちになり、亡くなられた方の方まで生きないといけないと強く思い、またこの震災のことを子供たちに伝え、風化させないようにと、1周忌には勤めていた幼稚園に近くの仮設住宅の方々をお招きして、子供たちの歌や詩の暗唱で追悼会を

開きました。その後も毎年1月17日には地震の話や避難訓練を行っています。5年目を迎えるにあたって、あの時0才だった子供たちが今、年中児にいます。年少児はもう震災を経験していない子供たちです。子供たちに命の大切さと地震の怖さを知ってもらいたいと願っています。

(垂水区、35歳、女性)

(10) まちの美化

- ・空地、公園などの隅に弁当の空箱、袋などが散乱して見苦しい。一人ひとりのマナーの悪さ、どうにかならないでしょうか。公園・空地进行をきれいにするのも復興の一つではないでしょうか。

(中央区、67歳、女性)

- ・震災直後の人々の優しかったことが思いかえされます。みんなが親切だったり助け合ったり、あれは別世界のこと



だったのでしょうか。復興も目に見える所は立派ですが、少し路地裏に入れば、まだまだのようです。その場しのぎのように感じます。これから先、神戸市はどのような街になるのですか。不況で大きな会社も大変なようです。やはり「観光神戸」なのですか。それには神戸の人が変わらなくては。神戸の人は温かだった、親切だった、きれいな街だった、と胸をはって言えるのでしょうか。以前、ありがとう、すみません、どうぞ、の標語がありました。あれを大々的に実行すべきです。あいさつ、笑顔、ごみのないまち、シンガポールのように。器も大切ですが、今ある施設を充実して「心に残る街」にしてほしい。神戸に生まれて神戸に育って神戸が大好きと言える街にしてほしい。絶対にすべきです。そのために、神戸の人はがんばります。

(東灘区、63歳、男性)

- ・「三つ子の魂百まで」と言います。くらしのマナーも幼いときに身につくものです。保育園や幼稚園で、毎日繰り返し繰り返し教え導いて頂きたい。あいさつやありがとう、ごめんなさい、お願いしますなど、他人に接するときのマナーはまず言葉です。基本の言葉が素直に口から出るように育てたいものです。暴力でしか自分を表現できないような子供にしてはかわいそうです。この頃、遠足の時にはごみを持ち帰るために、ビニール袋を持たせているのでしょうか？身につけたい大切な習慣です。自分の

身を守るためには、規則を守ることもしっかり教えなければなりません。立入り禁止、水泳禁止、キャンプは危険、といったことを聞けなかったばかりに、大人になった人が悲しい事故をおこしています。幼児期にルールを守る大切さを覚えさせておきましょう。

(中央区、67歳、女性)

- ・どこに行っても道路が美しいと、その街全体が美しく見えます。そのため、まず美しい街路を創出したいと思います。六甲山の植林は100年の歴史が美しい山肌を創り出していますが、街路も舗装等は短期間にできるとしても、本当の美しさのある、そして人の心を打つ道にするにはやはり20年以上を要すると思います。従って、一夜にというわけにいかなくても、トータルプランを作成し、その基本にそって地区毎に推進委員会のようなものを設け、ある意味で競って美化に努めるような方途を導入されてはいかがでしょうか。特に、老人会、シルバー成年会の活用は欠かせない力になると思います。市を愛し、その住居に愛着を持つ力を活かさないすべはないと思います。お年寄りを市長の委嘱で地域美化推進委員に任命といったようなやり甲斐を感じるシステムをつくって、街の美化と活性化に寄与していただく力になって頂ければと思います。

(垂水区、70歳、男性)

(11) 水と緑の豊かなまちづくり

- ・大規模な緑化を。開発がすさまじい勢いで進んでいる昨今、市街地といえども緑化を早急に進めていくことが大切。緑が人間に与える心理的な安らぎは非常に多大である。また災害時には、防火林、砂防、保水の役目を大きく果たす。自然と共存するためにも、動植物によっていやされる人間はなおのこと、コンクリートで固められた囲いから少しでも解放されて伸びやかに生きられる緑地帯を設置することが重要。

(北区、63歳、女性)

- ・私の住んでいる六甲アイランド(東灘区)には、町の中央に位置するリバーモールに人工の川があります。この川はかなりの水量の水がかなりの流速で流れています。10年程前にこの島に来て、この人工の川を見たとき、「川も憩いの場としていいけど、これだけの水量の水を流すのに、かなりの電力がいるだろう。何とエネルギーの無駄遣いか。」と、思ったものでした。しかし、今回の地震がこの川の価値を変えました。まず、この川の水がトイレなどの雑用水に使えました。六甲アイランドでは幸い地震の後に火事が発生しませんでした。火事が起きたときには、この人工の川の水がどんなに役に立っていたことでしょうか。このような人工の川が被災地にたくさんあれば、焼けずにすんだ家もたくさんあったことでしょうか。町にせせらぎをもっと増やすべき

です。六甲アイランドの人工川ほど大きなものではなくても、ところどころに水たまりを作ったり、滝や噴水などもいいでしょう。道路を横切るところにはパイプを使うのもよいでしょう。ただ、水を環流して人工的に流すするには、かなりの電力が要ります。そこで提案したいことは、この電力を風力発電機を用い発電したらどうでしょうか。風力発電機の出力端子と揚水ポンプの入力端子とを直接つなぐ方法はどうでしょう。風がないときには水の流れが緩やかに、風が強いときには早く流れるのもおもしろいと思います。

(東灘区、64歳、男性)

- ・神戸のシンボル、六甲山系の山並みは、ドライブしますと特に枯れた松が目立ちます。六甲の緑も先人の方々が植林されてから百年の歳月がながれ、この間非常な努力で保たれたとのこと。枯れた木を伐採し、そこに



繁み豊かな木を植林すれば、大雨の際も多少は被害減の一助になると思います。私も神戸生まれですが、小学校時代、湊川神社の大楠公六百年記念として1人10銭だったと思いますが、学校に持参し背後の菊水山に菊水をかたどって植林し、湊川神社の背後に見える緑の山を見て育ちました。神戸市内の小・中・高校生の卒業記念として100円くらいでも集め、財源の一部として植林すれば自然を大切にする気風を興せると思います。

(須磨区、74歳、女性)

(12) その他

- ・震災で多くの方が被害を受けた。被害の状況により異なるとは思いますが、震災後の家中を見回して、不要となったもの、不足しているものが、改めて目についた。例えば、我が家では子供達がすでに巣立ち、今や不要となっていたスタンドピアノが振動で横転し、地震後、夫婦だけでこれを整頓するのに苦労した。その後、ピアノは保育園などを対象として寄贈先を探したが、見つからず、結局知人に引きとってもらった。こうしたことを考えると、周辺の被害を受けなかった自治体等と協力し、住民相互で不要となったものを不足しているものと交換、もしくは、安価に売買できるリサイクルマーケットが開かれたらよかったのではないかと。この際、是非リサイクルマーケットを創設してみてもいいかと思う。

(東灘区、61歳、男性) ※再掲

- ・私が以前住んでいた大橋7丁目（長田区）で今、環境共生を取り入れたマンション作りに取り組んでいる。その中庭に、雨水を利用したせせらぎを作り樹木を配して、トンボ、鳥等の共生を考えている。もちろん作ることは簡単なのだが、問題はこれをどう利用し管理していくかである。この中庭は広く開かれた広場であり、住民以外の人達にもその利用を考えているが、住民だけの管理ではおのずと限界がある。そこで1つの提案であるが、近くに中学校があるので、理科の授業の一環として利用して頂き、そして、池やせせらぎの清掃を住民と一緒に月に1回行うことにするのはいかがだろうか。そうすれば地域住民とのふれあいもできるし、地域でのボランティア活動にもなり、また、中庭の整備にも役立つと思うのだが…。一つのモデルケースに利用すれば、内外に向けて、神戸市として大きなアピールになると思うのだが…。

（長田区、52歳、男性）※再掲

- ・震災の時の恐ろしさ、不便さをすっかり忘れかけているこの頃。がれきの山になってしまった神戸で、自衛隊の人が黙々と懸命に働いてくれたこと。あの若い力と人数がどれほど助けになったことか。災害の時には知事の判断を求めるとでなく、必要と思えば官公庁どこからでも自衛隊出動要請ができれば、もっと敏速にできるのではないだろうか。また、当時外国から来た救助犬が活躍したが、日本でも救助犬を警察もしくは自衛隊で育てたらどうだろうか。

（西区、55歳、女性）※再掲

- ・地震は季節や時刻を選ばない。阪神大地震は都市直下型で、その被害の大きさからすでに大量のデータが集められている。しかし、これらのデータはあくまで1月17日5時46分に阪神地区を中心とした地震とその被害、救出、復旧などのデータであり、それは1月の寒期の早朝のものである。他の季節、他の時間帯、そして、平日、休日の差などどう変わるのか。このデータを他に活用するため、諸条件の異なる予想をしておかなければ、阪神大震災のデータは生かされないと思う。夏だったら、お昼頃だったら、休日だったら、条件の変化ですべてが変わってくる。地震は平和な心を急襲してくる。地震は何時発生するかわからない。平和な日常生活の中に突如襲ってくるのが地震である。このような非常体験は、言語では他人に伝達しきれないが、地震対策としていくら器物を揃えていても、地震の急襲による精神的な大きなショックのもとでは充分活用できない。心のショックへの平常からのトレーニングはまず不可能だが、地震対策を論じるうえで、最も必要なことだと思います。

（西区、71歳、男性）※再掲

- ・震災は不運。これを幸運へのスタートにする。仮設住宅では不満の声も聞いた。キャ

ンプ生活と思えば楽しむ考えが湧く。慰安行事も、主催者の誠意を思えば元気が出る。顔も知らなかった方々との出会いも楽しい。被災者への物資配給。その心配りがありがたい。私は格別に宗教を信じている訳ではない。が、4年を経た今日でも仮設住宅の生活をなつかしく思い出す。私は海外引揚者である。50年前には、預貯金などすべての財産を失い着のみ着のままであった。それでも10年すれば生活が安定することを体験として知っている。不運の後、昔と同じ形の幸せは戻らない。が、新しい幸せは、必ず訪れる。地震の被害は悲劇ではない。試練である。この確信が私の心の復興への活力となっている。

(北区、76歳、男性) ※再掲

- ・大震災の体験から、例えば交通途絶の状況下においては通勤が困難となるため、各地区での避難場所や公的施設への出向を決めておくシステムを提案します。公務員の場合は、県職員、市職員の区別なく徒歩か自転車で出勤できる公的施設を決定し、その役割もシミュレーションしておく。民間企業についても同様に、関連企業が事前に調整して、緊急時の参集場所を決定しておく。以上により、無駄な自動車等による通行がなくなり混乱が解消されるとともに、いざという時に、落ち着いた対応がとれると確信します。なお、県職員ではこのシステムを小生が提案して参集カードが配布されていますが、市との連携や民間企業とはまったく連携されていませんので提案します。

(西区、54歳、男性) ※再掲

- ・災害時から災害後、医療は各個人の人脈等によって結ばれたのみで、地域あるいは機能別病院群として組織的な活動が出来なかった。救急体制を整備されつつあるのは承知しているが、より積極的な指導を望む。

例1：各病院、診療所の特徴を自らオープンにすることを指導し、市民が各自の判断で適切な医療機関を選べるようにする。

例2：医師会にまかせるのではなく、神戸市自身が具体的な方法を考え作りだしてほしい。特に、自ら名乗り出て活動しようとする個人やグループに対して規制をかけるべきではなく、道を開くべきである。

例3：上記を含め、情報を交換できる場を設置し(例えばインターネット上に)、具体的な医療情報がオープンになるよう指導すべきである。

(西区、46歳、女性) ※再掲

- ・災害時は道路の破損がひどく、且つ交通が混乱し、人・物の移動が長期間にわたり支障をきたした。大阪－神戸間は海上距離が短く、わが社では神戸支店の職員及び神戸市民に対する救援物資の運搬には通船、漁船をチャーターし、ピストン輸送して急場に役立てた(天保山－神戸メリケンパーク：片道約50分)。厳密に言えば、法律的に

は漁船の利用は問題あるかもしれぬが、非常時には行政が各漁協との間で協定を結び、各地区の漁港を利用し、交通物流を確保、利用し、且つ一般人にも活用させれば、それ相当の効果を得られると思う。神戸は漁港が細かく点在している。

(須磨区、62歳、男性) ※再掲